The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ジャクソン・ポロック
Author(s)	藤枝, 晃雄
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43223
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【16】

氏　　名	藤枝晃雄（ふじえだてるお）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　16680　号
学位授与年月日	平成14年3月12日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学　位　論　文　名	ジャクソン・ポロック
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　神林　恒道 （副査） 教　授　上倉　庸敬　　助教授　藤田　治彦

論文内容の要旨

本論文は、第二次世界大戦後の1950年代のアメリカに展開した抽象表現主義絵画を代表する、芸術家ジャクソン・ポロックの画家としての形成過程をたどった作家研究である。全体は次の十章から構成されている。「第一章　心の再構成」、「第二章　実験的作品をめぐって」、「第三章　主題の変奏」、「第四章　一九四三年」、「第五章　転換期の絵画」、「第六章　アクション・ペインティング」、「第七章　創造的な過程」、「第八章　オールオヴァのポード絵画（Ⅰ）」、「第九章　オールオヴァのポード絵画（Ⅱ）」、「終章　絵画の限界」である。

ジャクソン・ポロックは今日おそらくピカソに次ぐ、二十世紀における最も重要な画家として評価されているが、本研究はポロックの作家形成の軌跡をたどり、その芸術が現代においていかなる位置を占めるかを検討しようとしたものである。抽象表現主義の成功以来、フランスに代わって美術の覇権を握ることになったアメリカ絵画も、かつてはマージナルな存在でしかなかった。ポロックが当時のリージョナルなアメリカン・シーンの描写から脱却し、独自の世界を切り開いていくきっかけとなったのは、重度のアルコール依存症を癒すために、ユンギアンのジョセフ・アンダーソンから受けた治療であった。これを通じてポロックは、精神分析を利用したシュールレアリスムの芸術に触れることとなった。オリジナルなシュールレアリスムは、美術の領域を超えるところにある、文学的な方向性を示すものであるが、ポロックが自らの芸術に取り入れたそれは、造形言語を内包する、ミロあるいはマッソンに見られるようなバイオモフィックなシュールレアリスムであった。この出会いを論者は、当時のアメリカ絵画の後進性に基づけている。ポロックはその画業の発端からして、抽象のために抽象を目指した画家ではなかったのである。ヨーロッパ絵画のアメリカへの影響の時間差はまた、ポロックにピカソとキュビスムを白紙の状態からやり直すことを可能にしたのである。これを通じてポロックは、「平面の芸術」としてのキュビスムの理解を深めたのである。絵画を平面の芸術として捉えること、それはポロックにとって、ルネサンス以来の伝統であった三次元的イリュージョニズムからの転換を意味したのであり、彼はこの方向を独自のやり方で展開していったのである。それは画面のイメージを一つに結合してフィールドを形成すること、つまり従来の絵画の地と図の関係を曖昧化することであった。

この平面化の作業において、ポロックがキュビスムを超えたのは、多焦点的な、いわゆるオールオヴァ絵画を創出したことであった。そのために案出された独特の技法が、ポーリング（Pouring）の描法であった。このオールオヴァのポード絵画によって、それまでのイリュージョニズムは完全に超克されたのである。ポロックの絵画においては、見えてくる視野のみが表現となる。今やイリュージョンの表現は無効化され、絵画の在り方はその限界まで押し進め

られることとなった。ポロックは「芸術としての芸術」の絵画の極限に位置づけられる画家である。その先にあるのはもはや「芸術についての芸術」としてのメタ芸術しかあり得ない。それは芸術の一つの終焉をそれぞれの形で言表する芸術であり、その枠内においてのみ、わずかながら個別的な芸術表現を発現しているに過ぎないものである。

論文審査の結果の要旨

これまでわが国で書かれてきた欧米の作家研究は、その基本となるべき作品分析のおおかたが、もっぱら他者の眼に寄り掛かった二次的資料や文献に拠るところのものが多かった。この研究が何よりも評価されなければならないのは、論者自身の自らの眼の確かさを信ずることで書かれたきわめて説得力のある評論であることである。論者はわが国における、現代美術批評の第一人者であり、ポロックの創作の過程を追っての作品の選定とその具体的な作品分析の見事さは、このことを如実に物語っている。論者の分析は、現地で実見した体験をもとになされたものであり、文献やその他の資料による裏付けの作業についても、さまざまな角度から行き届いた目配りがなされている。国際的にも第一級のポロック研究として評価することのできる優れた論文である。

本論文は、ポロックという作家についての研究に留まるものではない。さらにポロックの芸術をその指標として捉えることによってなされた、現代美術についての鋭い批判としても読むことができる。そこで語られているのは、ポロックによってその限界に到達した絵画という芸術、あるいは芸術としての「絵画の終焉」の物語である。かつてヘーゲルによって、「芸術の終焉」が宣告された。しかしそれは同時に、「芸術における近代」の始まりの告知でもあったのである。今またここに「芸術としての芸術」の終焉が述べられている。作品の質を何よりも重視するフォーマリズム批評に身を置く論者が、ポロックを臨界点として眺めることによって引き出した、現代美術の状況についての見解は悲観的でさえある。

論文の構成はきわめて緻密であり、資料を巧みに駆使しての論述も申し分がない。しかしこのスタイルが時として、慎重に過ぎて読む側に回りくどさと晦渋な感じを与えないでもない。しかしこれも、あくまで主観的な印象に留まるものであり、本研究の優れた成果をいささかも傷つけるものではない。よって本審査委員会は一致して、ここに本論文を博士（文学）の学位を授与するに値するものであると認定する。